蓮如上人

梅原眞隆述

特218
950

始

特218
950

蓮如上人

梅原眞隆述

顯眞學苑出版部

自序

蓮如上人は最上の「法」を最下の「機」に光被せられた聖者でありました、蓮如上人は我等の言葉によつて法界の眞實を表現せられた聖者でありました、蓮如上人は祖聖親鸞の生命を嗣いで眞宗を再興せられた聖者であります。

この聖者の風格を讃嘆するため茲に二三の小篇を蒐めました、若し法喜の助縁ともなれば有難いことであります。

昭和五年四月

洛東葛南小隱にて

梅原眞隆

蓮如上人

目次

(一) 蓮如上人……(一)
(二) 安心の一境……(四九)
(三) 念佛三昧……(七三)
(四) 彌生の蓮如忌……(一〇三)

大阪の礎を運べる人

蓮如上人は本願寺の八代目の宗主であります、眞宗中興の聖者として私たちのいつも崇敬まうしあげてゐるお方であります、殊にわが大阪にとつては忘れてならない因縁を結ばれたお方であります。こゝに蓮如上人を讃仰することにしたのであります。また、動もすると蓮如上人は一般の俗衆から誤解されてゐられるやうにおもはれます。即ちお上手な妥協者であつたかのやうに、また不純な野心を抱いてゐられたかのやうに、少くとも親鸞を嗣ぐ方途としてはふさはしくないやうに批議するものもあります。かゝることが氣にかゝりましたので、上人の素純な温容をありのまゝに讃仰したい氣分になりました。また

尙ほもうひとつには、宗教のことはたゞこれを抽象的な論理で指示するよりも具體的な生活をとほして味ふことが趣のあることのやうに考へまして、こゝに蓮如上人を勸請したのであります。

この前の國勢調査によると、わが大阪はわが國第一の人口を有するといふことで、まことに大大阪と云ふべき時代になりました。この大阪の草分けをなされたのは蓮如上人であります、これについては、曾て谷本先生が中島の公會堂で「大阪より觀たる佛教」といふ講演をなさつたときにも注意されたことであります、大阪の繁昌の由來をさぐるものは、豊太閤が大阪城を築いたことに氣づくでありませう、その大阪城は石山本願寺の基礎のうへにできあがつたものであります、而して石山本願寺の礎を運ばれたのはこの蓮如上人でありました、即ち明應五年、上人八十二歳の秋、始めて石山の地を相して草堂を建立な

されたのであります。してみれば、大阪の啓拓者として、草分けをなさつた因縁は、大阪にすむ人々にとつて、殊に忘れがたいお方であります。

さて、上人は明應五年から御往生までの三年間といふものは、この大阪におすまひになつたので、つまり御晩年の勝境でありました。そして、この大阪の草堂は上人にとつても、最後終焉の地としてえらばれたのであつたのでありました。

同年(明應八年)の二月には大阪の御坊にて御往生有べき樣にて、御葬所までこしらへさせられけるが、俄に御思案ありて、城州山科へ御上洛あり云云と一期記にしるしてあります。かくて山科で御往生になつたけれども、殆んど最後までは大阪にゐらせられたのでありました。かくて上人の最後の勝地が大阪の最初の礎になつたことは、大阪にとつてはなつかしい因縁であるとまう

さねばなりません。

最後の御正忌の御文

さて、大阪に最後の草堂をおつくりなされた上人の感懷を味ふてみますと、そこに上人のなつかしい人格が髣髴として偲ばれます、凡そ蓮如上人とはどんなお方であらせられたかゞ思浮べられます。その大阪御坊を建立なされた感懷はいろ〳〵な文書によつてうかゞはれますが、今それをひとつ〳〵味ふ時間もありませんから、そのうちの代表的なものとして、明應七年の御正忌に御染筆なされた御文を拜讀いたします。

上人の代表的な選述は御文であります、數おほき御文、いづれもすぐれたも

のですが、とりわけありがたいのは、年々の祖忌にものされたものであります、なかんづく、明應七年の御正忌は上人の最後の御正忌であつて、ふかく死を覺悟したうちに御正忌に遇ふての御述懷をものされた御文であるだけ、このときの御文は御遺敎ともまうすべきものであります、まさに釋尊の涅槃經にも比すべき御文であります。こうした御文でありますから、たゞ大阪御坊建立の御感懷を偲ぶに足るだけでなく、上人の全き人格の發露ともいふべき御文であります。今この御文を拜讀しながら、いさゝか上人の溫容を瞻仰いたしたいとおもひます。

抑々當國攝州東成郡生玉の庄内大阪といふ在所は往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明應第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一宇の坊舍を建立せしめ、當年はは

やすでに三年の歳霜をへたりき、これすなはち往昔の宿緣あさからざる因緣なりとおぼえはんべりぬ。

これが冒頭の一節であります、「大阪といふ在所」とさゝれた地點は今の第四師團のあるところです、そして、大阪といふ名がたしかな文獻にあらはれるのはこの御文が最初であります。「往古よりいかなる約束のありけるにや」とか「往昔の宿緣あさからざる因緣なり」とか仰せられるところに、おのづからなる宗敎的なうるほひがあらはれて居ります。すべてのこと、ひとつも偶然といふことはない、無意味なものはない、われらにははつきりわからないけれども、みんななつかしい神祕的な因緣がからみついてゐることを感じられたのであります、三千大千世界にけし粒ほどの土地も如來の血涙のしみついてゐないところはないと云ふ安心決定鈔のおことばなどが思ひ合はされたことであります、

さては聖徳太子が難波に四天王寺を創立なされたことなども思浮べられたことでありませう、とにかく、上人にとつては最初の土地でありながら、なんだか最初の土地をふむやうな氣がしなかつたのです、遠いむかしから約束せられた土地にきたやうに、しみ〴〵と宿縁といふことをなつかしく、またありがたく感じられたのでありました。

これについて、この在所に居住せしむる根元はあながちに一生涯をこゝろやすくすごし、榮華榮耀をこのみ、花鳥風月にもこゝろをよせず、あはれ、無上菩提のためには、信心決定の行者も繁昌せしめ、念佛をもうさんともがらも出來せしむるやうにもあれかしとおもふ一念のこゝろざしをはこぶばかりなり。

蓮如上人が實如上人に職をゆづられたのは延徳元年、七十五歳のおんときでありました、故にいはゞ樂隱居の身の上であつて、大阪の御坊も隱居所としてつくられたものであつてよいのであります、一宗の再興を完成された上のことであるから、せめては餘生を氣樂におくられてもよいのであります、けれども上人は隱居の身分になつてからも依然として出口富田堺などの地を往返して教化に力を注がれたのであります、そして最後にこの大阪に御坊をつくられたのでありますが、その動機はこの一節にあらはれてゐるごとく、決して、樂隱居の休息と風流のためでなくて、最後の教化の地盤としてきづかれたのであります、一人でも信じてくれるやうに、一人でも念佛をまうしてくれるやうにといふ純な希念によつて大阪御坊がうちたてられたのであります、この尊い「一念のこゝろざし」をこめて大阪の最初の礎が運ばれたことをおもふとき、多少の感慨に打たれずに居れないのであります、われらの脚下には深い希念が

うちこまれてあるのです。上人の一生涯は、たゞこの素純な自行化他の一念によつてつき動かれたのでありました、われらはこうした尊い希念を素直に領納しなくてはなりません。

また、いさゝかも世間の人なんども偏執のやからもあり、むつかしき題目なんども出來あらんときは、すみやかにこの在所におひて執心のこゝろをやめて退出すべきものなり、これによりていよ〳〵貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を決定せしめんこと、まことに彌陀如來の本願にあひかなひ、別しては聖人の御本意にたりぬべきもの歟。

蓮如上人の經營のあとをみるものゝうちには、動もすると世俗的な勢力の擴大を企圖せられたかのやうに臆測するものもあります、とりわけ石山本願寺がのちに天下の武將と拮抗したことなどから逆觀して、教勢發展の支撐點としての要害を占有されたかのやうにながめる人々もありますが、上人は決してかかることを意識せられたのでないことが、この一節でもありありとうかゞはれます、「少しでも世間の人が片意地なことをいひ出したり、むづかしい難題などいひかけられたら、すみやかにこの場所に心のこさずに引あげてよいのである」とまうされてあります、この大阪御坊が人の邪魔になるやうならいつでもひきあげるといふ謙虚な態度であります、大阪に御坊をつくられたのはたゞひとつの魂でも眞實によびさまさうといふ懇念より外に何ものもなかつたのであります。それであるから、いよ〳〵病みふして再び起つことができないと覺悟なされたとき、滿腔の懇念を披瀝して信心をいたゞくやうにと門葉に迫つて居られます、左にかゝげる最後の一節のごとき、涙なしには拜誦されない切々たる眞情の披露であります。

それについて、愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條不思議なり、まことに當流法義にもあひかなふ歟のあひだ、本望のいたりこれにすぐべからざるもの歟、しかれば愚老當年の夏ごろより違例せしめて、いまにをいて本復のすがたこれなし、つねには當年寒中にはかならず往生の本懷をとぐべき條一定とおもひはんべり、あはれ〳〵存命のうちに、みな〳〵信心決定あれかしと朝夕おもひはんべり、まことに宿善まかせとはいひながら述懷のこころしばらくもやむことなし、またはこの在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし、あひかまへて〳〵、この一七ヶ日報恩講のうちにをひて信心決定ありて、我人一同に往生極樂の本意をとげたまふべきものなり、あなかしこ〳〵、明應七年十一月二十一日よりはじめてこれをよみて人々に信をとらすべきものなり。

この御文は一篇の散文詩であります、五帖御文のうち第四帖の第十五通に編まれてありますから、雨のふる夜など、しんみり落ついたときにひとりでくりかへして拜誦していたゞいたら、この一通のうちにながれるおこゝろもちが誰れにも素直にいたゞかれます、そして蓮如上人といふお方の溫容が髣髴として偲ばれます、「宿善まかせとはいひながら述懷のこゝろしばらくもやむことなし」と仰せられるあたり、ほんにやるせない希念であります、上人は終焉のときまで念じつゞけられました、御病床のおなぐさめに空善が鶯をまゐらせたとき、そのなく聲をきいておよろこびなされ「この鶯は法をきけよとなく也されば鳥類だにも法をきけとなくに、まして人間にて、聖人の御弟子也、法をきかではあさましきぞ」と仰せられたといふことであります、お念佛まうしてくれ、信心をいたゞいてくれといふ一念のまごゝろ、それが結晶したのが上人

の御一生でありました、かゝる御一生はすべての人々にとつてかぎりなく尊い供養であります。「この在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし」といふ一句も、とりわけ大阪にとりては味ふべきお言葉であります、塵勞にまみれた大阪のまんなかにしづかに合掌して念佛まうさるゝ人があらはれたとき、上人ははじめて微笑されるときであります、大阪といふ都會の基礎にかゝる希念の埋もれてゐることは意味ふかいことであります。

天王寺の土塔會

また大阪と蓮如上人をおもふとき、聯想されるのは、天王寺の土塔會における御述懐と、堺の日向屋についての御感想であります。

天王寺土塔會、前々住(蓮如)上人御覽候て、仰られ候。あれほどの多き人ども、地獄へおつべしと、不便に思召候つる由、仰られ候。又その中に御門徒の人は、佛になるべしと仰られ候。これ又ありがたき仰にて候。

(御一代記聞書)

その頃、天王寺の南大門の下に土塔塚といふのがあつて、そこに牛頭天王を祀つた宮があつた、毎年四月十五日に祭がいとなまれて、天王寺の僧の舞樂などにて大變に賑ふたものらしい、それが土塔會と稱するものでありました。蓮如上人はその土塔會に群る大衆が、迷信のなかに果敢ない幻影を弄んでゐるのを御覽なされて、「あれほど多き人ども地獄におつべし」と仰せられました。それは冷たい皮肉な言葉でなくて「不便に思召」れたのであります、かく仰せられた上人の眼底には涙が光つてゐたことがわかります。若し上人いまさば華

やかな現代の大阪の繁昌を視つめられたとき、またこの言葉をくりかへされないでせうか。

上人は愚な俗衆に媚びず、群り踊る俗衆の生活をみて、「ほろびてゆく生活である、地獄におちる」と怖ろしい警策を與へられました。深刻な愛と、誠實に眞實を說破された勇氣とを見出さずに居れないのであります。

堺の日向屋

大衆の迷妄を鋭く批判して憚からなかつた上人は、また特權階級の生活に向つても率直に批判せられました。

蓮如上人仰られ候。堺の日向屋は三十萬貫を持たれども、死にたるが佛にはなり候まじ。大和の了妙は帷一つをもきかぬ候へども、此度佛になるべきよと、仰られさふらふ由に候。（御一代記聞書）

そのころの堺は外國貿易の要港であつて、今日の神戸や横濱のやうな繁華な土地でありました、その土地の日向屋は有名な資產家であつたに相違ありません、しかし三十萬貫の黃金も生命の糧にはならないのであります、黃金をつかんだら眞實に生きられるとかんがへて專念に努力してゐる無自覺な生活の幻影を摧破せられたのが、この仰せであります。

特權階級や資產階級の機嫌を窺ふて、それとなく眞理の割引をしたり、いつはりの證左を弄ぶ人たちは、こうしたお言葉のまへに懺悔しなくてはなりませぬ、三十萬貫の黃金も念佛のまへには土くれにひとしい、眞實に生きるものはほろびない念佛に更生しなくてはならない、こうした見地から、金に埋もれ

た豪奢な日向屋と雖一枚きかねた貧しい了妙とを比べて、その價値の顚倒を示されたところに上人の信念が光つて居ります。

動もすれば上人の生活をながめて、巧みに金持を取こみ、俗衆に阿つて、本願寺の地盤をきづかれたお方であつたやうに誤解するものもあるが、こうした仰せを味ふだけでもそれらの誤解をとりのけなくてはならない、上人は眞摯に率直にそして誠實に、眞實をかたりつゞけられた純なお方であつたことを仰がねばなりません。

上來、大阪と蓮如上人についての雜感を思ひ浮ぶまゝにのべましたが、それはたゞ大阪と上人といふ關係にかぎられるものでなくて、そのまゝ全き人生と上人との交渉を伺ふに足るべく、人生と宗教との生ける關係を暗示するものであります。

御本尊の純化

次に親鸞聖人を嗣ぐものとしての蓮如上人を思ひうかべてみやうとおもひます、これについての私見はすでに「親鸞聖人研究」にも縷述しておいたことでありますが、約言すれば蓮如上人は祖聖の復活者でありました、「親鸞にかへれ」とはその一生の根基をなす標語でありました、「御本寺をば(親鸞)聖人御存世の時のやうに思召され候、御自身(蓮如)は御留守を、當時御沙汰候」(御一代記聞書)こうした復古運動はいろ〳〵な方面にあらはれて居りますが、まづ注意すべきことは御本尊の形式を純化なされたことであります、御本尊の形式を純化するといふことは一宗派としてはよほど思切つた試みであることは

云ふまでもありませぬ。

「御流にそむき候本尊以下、御風呂のたびごとにやかせられ候」（御一代記聞書）とある記錄をよんでも、木像を燒いて凡僧の偶像觀念を打破した丹霞のやうな鋭い識見がひらめいてゐることを感じます。生命は具象化してゆくものであります、具象化してこそ生命が完全に人生の内容となるのでもあります、けれども具象化することゝ偶像化することゝは似たやうで實はすつかり違ふのであります、表象は生命の顯現であり、偶像は生命の滅亡であるのです、あはれ一流の御本尊もいつしか寺院といふ形式に制約されて偶像化されてしまひました、そこで、かの「當流（眞宗）には木像よりはゑぞう、繪像よりは名號といふなり」とて木像や繪像の本尊形式をとりのけて名號本尊に還元されました、これはあらゆる偶像的固定を打破して生ける眞佛を解放せんとする批判であり

ます、そして、御草庵に名號を本尊としてひざまづかれた祖師聖人のむかしにたちかへらんとする復古の希念があらはれてゐるのであります。

なほ上人が、數おほくの名號を御染筆なされて、門徒へ御授與になつたことも、全くこの復古の努力であります、そしてその名號を御染筆なさるのにも、「南無の字は（親鸞）聖人の御流儀にかぎりてあそばし」たといふことも、なつかしい復古的還元のおこゝろもちがしのばれます、親鸞聖人は「南無」の「無」をば無の字の古字の「无」をおもちゐになりました、その「无」の字形も一の字の上に爪のある殖一の流儀でありました、蓮如上人はこの祖師の流儀でしるされたといふのであります。

一面において御本尊を燒くほどの非凡な識見を示されると共に、一面においては一點一劃をも私せない細心な用意がありました、大膽と細心との周備し

た上人の性格は恭敬すべきものであります。細心をかいた大膽は生命をきづゝけ、大膽をかいた細心も生命を見のがすものであります。上人のやうな行届いた人格によつてこそ、始めて衰頽せる一宗を純全に復活することができたのであります。

威儀をはねのけて

また善如上人、綽如上人の兩御代は「威儀を本と御沙汰なされし由」を仰せられて、「この二幅の御影をも、やかせらるべきにて、御取り出し候ひつるが、いかゞと思召候ひつるやらん。表紙にかきつけて、よしわろしとあそばされてとりてをかれ候」(御一代記聞書)といふ記錄があります。

蓮如上人の以前は本願寺としては暗黑時代であつたやうであります「蓮師以前には淨土宗の流儀多くうつりて、種々の邪義出て(中略)當流の正義は誠に知る人稀なり」(本願訣)とあるごとく正しい信仰の生命は見失はれてゐたのであります。從つてたゞ形式を構へることに氣を奪はれてゐられたやうです。

玄康法印(巧如)圓兼法印(存如)も、時々形儀をも聲名をもかたく敎へましましかども、又田舍の衆にても、對座にて、一首の和讃の心なんどをも、仰せ聞せられたることなし。(山科連署記)

巧如上人の頃には、威儀をのみ重んぜられたればそれがために歸依者も少くなりて宗門は衰頽せし由。(破邪問答)

これらの記錄をみても蓮如上人の以前の本願寺は、純正な生命を見失ふて、たゞ威儀の形式によつて白く塗られた墓のやうなものであつたことが想像され

ます。

愚禿の後裔が黄袈裟黄衣の威儀を粧ふて、いつしか貴族化し聖者化してゆくことは淺間しいことゝ慚愧せられて、先代の御影をも燒きすてんとまで感傷せられたのであります。

それで上人は「無紋のもの」をきることさへ遠慮されて、ひたすら「殊勝さうにみゆる」聖者的威儀をさけられました、そこでたとひ「牛盗人といはるとも、佛法者後世者と見ゆること」をさけて、專念に内なる生命を哺まれたのであります。

かやうに、偶像の固定をぶち破つて眞佛を解放し、形式の威儀をはねのけて愚禿の信心に住せられた批判のこゝろを思ふとき、蓮如上人は親鸞聖人の後裔として、いかにもふさはしいお方であつたことが分明とうかゞはれます。

同朋愛の發露

更に注目すべきことは同朋愛の實現であります。

蓮如上人は上壇の座をひきさげて、同行と共に平座にて對面なされたといふことであります。一段たかいところに坐つて同行に對することがどうしても落つけなかつたのであります、封建的な時代に生れて、高いところに坐ることが寧ろ自分の卓越を示すやうに考へられた時代にあつて、かゝる態度をとられたことは注目すべきであります。

身をすてゝ、平座にてみなと同座するをば聖人のおほせに、四海の信心のひとはみな兄弟と仰せられたれば、その御ことばのごとくなり。(御一代記聞書)

これ「親鸞は弟子一人もゝたず」といふ祖聖の御持言を、身を以つてうけつがれたのであります。

「法敬とわれとは兄弟よ」と親しまれた、御堂衆といふ低い職掌の人と、本願寺の法主とがこうして兄弟として握手されたところに、親鸞教のあたゝかいところがあります。

また、門徒を大切になさつたことは非常なものでありました「開山聖人の一大事の御客人と申すは、御門徒のことなり」と仰せられ、「御門徒衆をあしく申事、ゆめ〳〵あるまじきなり、開山は御同行御同朋と御かしづき候に、聊爾に存ずるはくせごとの由」仰せられました、寒いときには酒をあたゝめて歡待なされたこともあり、怠屈してるときは可笑しい狂言などして門徒をなぐさめられたといふことであります。

天王寺の土塔會に俗衆を批判して「地獄におつべし」と批判された上人が、その門徒のまへにかゝる態度をとられたのであります、これを以てたゞ巧みに門徒をあつめた技巧とみてはなりませぬ、温いそして謙虛な同朋愛の發現であります。

上人の御一生において、本願寺は日本に於ける最も力づよい教團となりました、餘他のすべての宗派はみんな特權的な勢力に依存し、封建的な因襲によつて、その地盤をきづいたのでありますが、上人は全くそれと趣を異にして素純な同朋意識のうちに本願寺をうちたてられました、敢て外的な發展を期待されなかつたのであります、「一宗の繁昌と申すは人の多くあつまり威の大なる事にてはなく候、一人なりとも信を取るが一宗の繁昌にて候」とひたすら純な内的な充足をもとめられたのでありますが、溫切な同朋意識が自然にあらゆ

る民衆をひきつけて、やがては織田右府の百萬の兵をもつてしても、左右することのできないほどの健實な教團がうちたてられたのであります。

すべては「親鸞にかへれ」の一念の發露であつて、つまり、蓮如上人は純全に祖聖親鸞を嗣げる再興者であらせられました。

祖聖のおん前に跪きて

「親鸞にかへれ」といふ復古運動はさきにものべたやうに、蓮如上人の一生の基調でありました、勤行の樣式をあらためられたことも、亦この復古運動のひとつのあらはれ方でありました。

當流朝暮の勤行、念佛に和讃六首加へて御申候事は、近代の事にて、昔も斯樣には御申ありつる事有げに候へども、朝暮になく候つるときこゑ申候。存如上人御代まで六時禮讃にて候つるとの事にて候、（中略）文明の初頃まで、朝暮の勤行には六時禮讃を申て侍りし也、然るに蓮如上人、越前の吉崎へ御下向候ては、念佛に六首の御沙汰候しを承候てより以來、六時禮讃をばやめ、當時の六首和讃を致二稽古一、瑞泉寺の御堂衆も申侍し事也。（實悟記）

つまり、これまでは淨土門の通規に準じて善導大師の六時禮讃を勤行に諷誦することになつてゐたのであるけれども、かゝる儀式は日常生活に取まぎれてくらしてゐる一般の生活には適切でないことでもあり、また一宗としての特質も認められないので正信偈と念佛に和讃をまぜていたゞくことにせられたのであります。そこで、文明五年の三月には正信偈と三帖和讃とを開板して、ひろ

く一般の信徒の拜誦を差許されたのであります。この正信偈と和讃はいふまでもなく親鸞聖人の代表的撰述であつて、一流の精要を表現したものであります正信偈は御本典卽ち敎行信證の行信兩卷の蝶番ひをなす偈頌であつて、一宗の本質を純全に表詮せられたものであり、また和讃は和語の御本典とも稱せらるゝところであります、かくて、朝な夕な御内佛に跪いて念佛申しながら、こゝろ靜かに正信偈和讃をいたゞくとき、坐に親鸞聖人の膝下に侍つてまのあたりその慈育を蒙るやうなつかしい法味が内感せられます、こうして門徒の大衆がうちつけに佛德を讃嘆し聖人に親炙することのできるやうに朝夕の勤行を簡潔にして純淨にせられたことは、適切な試みでありました。

而して朝な夕な佛前にて正信偈和讃をいたゞく心得についてもねんごろにおさとしなされて、自力の行者のやうな堅苦しい律法化に囚はれたり、また不純なまゐらせごゝろに落入らないやうに注意されてあります。御一代記聞書には次のごときお言葉がしるされてあります。

一。十月二十八日の逮夜に(蓮如上人)のたまはく、正信偈和讃をよみて、佛にも聖人にもまゐらせんとおもふか、あさましや、他宗にはつとめをもして廻向するなり、(聖人)の御一流には他力信心をよくしれとおぼしめして、聖人の和讃にそのこゝろをあそばされたり、ことに七高僧の御ねんごろなる御釋のこゝろを和讃にきゝつくるやうにあそばされて、その恩をよく〳〵存知して、あらたふとやと念佛するは、佛恩の御ことを聖人の御前にて、よろこびまふすこゝろなりとくれ〴〵仰られさふらひき。

一。(蓮如上人)のたまはく、朝夕、正信偈和讃にて念佛まふすは往生のたねになるべきか、たねになるまじきかと、おの〳〵坊主に御たづねあり、みな、

まふされけるは、往生のたねになるべしとまふしたるひともあり、往生のたねにはなるまじきといふひともありけるとき、仰に、いづれもわろし、正信偈和讃は、衆生の彌陀如來を一念にたのみまゐらせて後生たすかりまふせとのことはりをあそばされたり、よくきゝわけて信心をとりてありがたや〳〵と、聖人の御前にてよろこぶことなりと、くれ〴〵仰さふらふなり。

この御さとしは、いかにも懇切なものであります。私たちは朝な夕なお内佛の前にぬかづいて正信偈和讃をいたゞくのは、この勤行や讀誦の功德をつみ、それをふりむけまゐらせて、往生の因種にしやうなどゝいふ自力修善のいとなみでないことはいふまでもない。それかと云つて、無意味な空虛な形式に終るのでもない。祖聖のおことばをいたゞくのはそのまゝ祖聖のおほせを蒙つて、救はれゆくことわりをきゝひらくことであり、また、救はるゝ身の法喜を感謝することであるとの仰であります、してみれば勤行こそ凡人生活における念佛の三昧境であつて、如來聖人の恩德を仰ぎ、絶對救濟の光悅を慶ぶ聖なる道交の一境であります。「ありがたやゝ〳〵と聖人の御前にてよろこぶ」勤行のこゝろもちには、かぎりなくなつかしい豐かな情趣がこもつて居ります。

こうして、蓮如上人が自然に無理のかゝらないやうに、宗教生活を深めるやうに、祖聖の御前に跪いて、合掌のうちに日ぐらしできるやうに御そだて下されたことを感謝しなくてはなりませぬ。

凡衆の聖典としての御文

朝夕の勤行に正信偈和讃をいたゞくと共に、最後に御文を拜讀することも慣

例になつて居ります、御文の拜讀は蓮如上人の御存生のうちにも堺の御坊にて參詣の人々によんできかせられたことでもあります。

蓮如上人五帖の御文被ㇾ遊候て、實如上人へまいられ、これに御判を据られて、天下の尼入道へ御免あられ候へ、これにすぎて佛法の義とては別におりやるまじいぞと仰られ候、これによりて實如上人御代にては京田舍ともに御文いよ〳〵肝要と仰いだされ候。（桑玄聞書）

そして上人の示寂の後はこれを一般に頒布して勤行の折に拜讀することゝなり、遂に圓如上人の五帖御文の編纂となつたのであります、五帖御文はすべて八十通であるけれども、上人の御一生にものされたものは數おほいもので、現存する丈けでも二百六十六通の多きにのぼつております。

この御文はさきにのべたやうに、蓮如上人の御教化の結晶した代表的撰述で

あります。

上人が御文を御つくりなされたお心持はきはめて明白でありまして、どんな愚な人々にでも一宗の本質をまちがひなくのみこめるやうに、すべての人々に如來の招喚をつたへるやうにとの親切より外にはありません、上人は眞實を發掘する啓拓者ではなくして、上人は祖聖の領納された眞實をすべての民衆のものとして徹底せしめることを念願せられたお方でありました。

御文のこと、文言おかしく、てにをはもあしく侍れども、もし一人も信をえよかしと思ふばかりにて書をき侍り、てにをはのわろきをわがとがといふべしとぞ仰らる。（一期記）

かる〳〵と愚痴の者のはやく心得まひらせさふらふやうに、千の物を百に選び、百の物を十に撰ばれ、十の物を一に、早く聞分申 樣にと思召され、御文

にあそばしあらはされて、凡夫の速かに佛道なる事をおほせたてられたる事にてさふらふ。（御若年の砌の事）

つまり、どんな愚なものでも、適切に一宗の眞髄をいたゞけるやうに、平易にかみくだき、簡明に洗練しておしめしくだされたのであります、民衆の聖典としてはこの御文に比ぶべきものはありません。

けれども、平易であり簡明であるといふことは、決して淺薄であるとか未盡であるとかいふことではありません、上人は最高の眞實を普遍の生命として流露せしめられたのであります、やさしいおことばのなかに、深い法味と純な眞實とがありのまゝにふくまれて居るのであります。こうして一宗の精要をやさしくかみくだかれるまでには異常な辛苦をなめ努力を支拂はれたのでありまして貧しい御生活のうちに油なども不自由な折には、黒木を燒きて聖教をよみ、月

夜には月の光で讀書なされ、とりわけて教行信證のごときは讀みやぶられたといふことであります。かゝる苦心の結果、愚な無耳人にもあきらかに招喚の勅命をきかしむるやうに御文をものされたのであります。さればこそ御文は如來の眞言としての權威を帶て恭重されたのであります。

御ふみをば如來御直說と存ずべきのよしに候、かたちをみれば法然、ことばをきけば彌陀の直說といへり。（御物語次第）

また、上人御自身にとつても、この御文は會心のものであつたとみえます、御往生の三日まへに次のごときことが傳へられてあります。

蓮如上人、明應七年の夏頃より御煩ひにて、明應八年の三月二十五日に御往生にて候、しかれば二十五日三日まへに、法敬坊に御文よませ申され候て御聽聞なされ候、一段御感じなされ候、おれがつくりたるものなれど

も、まづは殊勝なるよなと仰られ候、おれが聞様に、門徒の者が聞くことならば、みな信をえられうずるぞと仰られ候。（榮玄聞書）

御終焉にちかき上人が、みづからものされた御文を聽聞して殊勝であるとおよろこびなさるお姿は、名匠が自分の刻んだ佛像を拜んでゐるやうな床しい風格であります、そこにはみづからつくつたといふこゝろもちよりも、如來のおほせられたお詞ときゝとれることであります、「かやうにみな〳〵申言葉までも、みな彌陀のいはせらるゝ事ぢやぞ」と仰られたといふことであるが、こうした妙趣が自然に味はれます。

たうとい眞如はつねにすべてを露現して居ります、正覺の大音はあらゆるところに響流して居ります、けれども、その眞如を認め、その梵音をきく能力のないわれらは無耳人であり無眼人であります、こうしたあはれな凡衆のために

ものされた聖典が御文でありました。

たすけたまへとたのめ

この御文には一宗の眞髓がいかにも、物柔かに、しかも的確に道破せられてあります。

親鸞聖人の御流は、一念のところ肝要なり、かるがゆへにたのむと云ふことは、代々の祖師あそばしをかれたれども、くわしく人々も領解なく候しに先師（蓮如）上人、御文と申物に、あそばしをかるゝ仰に、後生たすけ給へと一念に彌陀をたのめとの仰にて、各〳〵あきらかに心を得たり、然らば先師（蓮如）上人は一流の中興上人にてましますと申事、此故也。

こゝに示されてあるとほり「たすけたまへとたのめ」といふことをあきらかにせられたのが御文の根本要義であつて、やがてそれが上人のすぐれた貢献であつたのであります、さてこの「たすけたまへとたのめ」といふことは他力の信心の味ひを示されたのであつて、双手はなしておまかせし切る絶對歸依のこころをあざやかに示されてあります、更にこれを鮮活にいひあらはして「阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらするおもひをなして、後生をたすけたまへとたのみまうせ」と仰られてあります、すべてのはからひをうちすてゝ如來のお慈悲ひとつに身もこゝろも一切合財任せきつたありさまが素純に表現されてあります、信仰とは全人格的な肯認であります、薄紙一枚のへだゝりもない念佛の三昧境がいかにも力づよく生々と表詮されてあります。

この信心の一境が古來いろ〳〵の言語によつて表詮されてきました、いま蓮如上人は物柔かな使ひなれた平明な日本語によつて表詮されたのであります、つまり「私たちの言葉」によつて遺憾なく云ひあらはしてくだされました、これによつて一人ものこらず眞宗の信心を紛ふことなく領納する機縁が成就されたのであります。

尤も、のちにはこの「たすけたまへとたのむ」といふことが、自力のはからひを運ぶことでゞもあるやうに誤つた人たちもないではありませんでした、それは宗教的經驗について眞摯な理解と素純な感觸を有せない人々の傷ましい躓きにすぎませぬ、若くは、文字や論理を弄んで生ける宗教心を見わすれたものゝひねくれた小賢しいはからひにすぎませぬ。

すべてをお任せするこゝろ、全人格的な歸投はこのまゝ、すべてをこのまゝ收めとつてすてたまはぬ佛心のあらはれであります、いつも母の袖にすがる子

供のすがたは愛を求めていのる淋しい表象でなくて、何となくたよらずに居れない、慕はずに居れない母の慈愛の自然な影現に外なりませぬ。

「たのめ」とはおまかせすること、よりかゝること、よりたのむこと、即ち信任であり、依憑である、歸投である。つまり、如來のおほせにしたがひ、めしにかなふ絶對信順のこゝろであります、そして「たすけたまへ」とはその信相であります。これを、かれこれとひねくれた詮議をして自力の祈願や凡夫の運心のやうに誤解するのは、いかにも心なき業であります、それらについては、宗學的な論證をしてその謬解を打破することも無用ではないが、それよりもものと端的なことは、素直に上人のおことばをいただいて、その素純な語感を味ふことが大切です。そうすればおのづから紛ふことなく他力信心の妙趣が味はれることであります。

名もなきわれらの平凡な言葉のうちに、のこるところもなく、希有最勝の第一義諦を表詮されたところが非凡な試みであります、そして親切のこもつた教示であります。

總ぐるみのおたすけ

一人は全人格的な歸依によつて更生されました、それであるから、全き生活をひつさげて、身もこゝろも一切合財總ぐるみのおたすけを慶喜せられました、「彌陀をたのめば南無阿彌陀佛に身をばまるめられた」法悅を經驗せられました。

全き生活、それを通俗的にわかりやすく云へば衣食住の三つであります、上

人は貧しい生活をなさつてこの衣食住もこと〴〵く窮乏のありさまでありましたけれども、御光に養はれて生かされた上人は貧しい生活のうちにもちつとも不足や窮乏を感じないで、たゞありがたい御勿體ないといふ冥加を感戴せられたのであります。

一、晝夜不斷の仰には、第一冥加の方を上下共に心得べき由の仰のみ也。就レ其仰の品々あり、あたらしき物をめされし時は必ず聖人の御前へ御參りありて、聖人へ向ひまいらせられ、御用にて是御着用也ありがたく候と御えりを引出されて、御前にて見せまいらせられけりと也、きこしめさるゝ物にも御身にめさるゝ物にも、不斷御用の程を思召しける體是あり、もとより御詞にも出され、毎日毎夜冥加の段、堅仰られし事なり。（一期記）

一、衣裳等にいたるまで我物と思ひ、踏たゝくる事淺間敷事なり、悉く聖

人の御用物にて候間、前々住（蓮如）上人はめし物など御足にあたり候へば御いたゞき候由うけたまはり及び候。（御一代記聞書）

衣服を新調なされたときは、まづそれを祖師聖人の御影前へ持參して、しみじみといたゞいてお禮をまうされてから着用なさつたといふのであります、すべてが白毫の恩賚であるといたゞかれたからであります。それゆゑに御自身の御召物がはからず御足にあたるときなぞ御勿體ないと御いたゞきなされたといふことであります。なんといふ床しいお姿でありませうか。

一、或夜、老少男女上下共に參集の時、あら空おそろしや、世間には物も食はずして寒がるものも多きに、食たきまゝに食て、着たきまゝに物を着る事は聖人の御恩なり、この御恩ををろそかに思ひ侍るはあさましき事なり。（一期記）

一、御膳まゐり候時は御合掌ありて、如來聖人の御用にて着食よと仰られ候。（御一代記聞書）

一、蓮如上人、物をきこしめし候にも、如來聖人の御恩にてまし〳〵候を御忘れなしと仰られ候、一口きこしめしても思召出され候由仰られ候。（御一代記聞書）

一、御膳を御覽じても人のくはぬ飯をくふことよと思召候と仰られ候、物をすぐにきこしめすことなし、たゞ御恩のたふときことをのみ思召候と仰られ候。（御一代記聞書）

すべてが御恩のかたまりである、單なる物質をかみくだくのではない、一椀の飯はそのまゝ生ける慈愛のかたまりである、こうして御恩を感じながら合掌せられたとき、お粗末な食物がそのまゝ百味の飲食のやうにいたゞけたにちが

ひありませぬ。

前々住（蓮如上人）仰られ候、家をつくり候ども、つぶりだにぬれずば、何とも角ともつくるべし、萬事過分なることを御きらひ候。（御一代記聞書）

質素な家のなかにお念佛して安らかにおくらしなされたお心持が偲ばれます

よろづのこと、過分なることは落つけないとおきらひなされた上人のこゝろは素純であり謙讓でありました、御恩のなかにまるめられて生かされることを思へば、とても、ぜいたくなことはできなかつたのでありませう、いかにも床しいおこゝろもちであります。

衣食住についてこのとほりであるから、すべてのことが推量せられます、かの御廊下をとほりなされて紙切のおちてゐるのを拾ひ上げて「佛法領のものをあだにするかや」と仰られたことや、番匠などを使はれたときも「いさゝかな

る木のきれはしをとりをかせ、大切にするは佛法のものとおもふゆへなり」と仰られたことなぞ、上人の御生活を追憶すると、どんな斷片にも美しい光があります、なつかしい感じがいたします。

蓮如上人の御一生はさながら生ける曼荼羅でありました。生命のかよふた經藏でありました。

安心の一境

凡衆を養ふ愚禿の裔

蓮如上人は本願寺第八世の宗主であらせられ、淨土眞宗の中興の聖者であらせられました。

親鸞聖人を啓拓者とすれば覺如上人は傳持者である、そして蓮如上人は弘通者とまうすべきでありませう。淨土眞宗がわが國に於ける最も有力な宗派として津々浦々まで弘まつたこと、すべての群生の歸仰をあつめることになつたのは、全く、この蓮如上人のおかげであります。

上人の御足にきらりと草鞋のあとが喰ひこんでゐたといふことでありますがまことに上人は一生をさゝげて大悲傳普化の聖業に奉仕されたのでありました

そして、上人は最高の大法、すなはち最もすぐれた宗教的眞理を、何等の教養もない凡衆に徹底せしめねばやまない慈愛と熱誠を有してゐられました。今日われ〳〵が朝な夕な拜誦して法味を愛樂する「御文」は上人の教化の結晶であります、全く凡夫往生の手鏡であります、凡衆の聖典としておくられたものであります、上人は誰れでも如來のお慈悲をいたゞけるやうに物柔らかな愛語をもつて、かんでくゝめるやうにおさとしくだされたのでありました。

上人は學者のやうに語られなかつた、また上人は聖者のやうに振舞はれなかつた、あくまで「愚禿の裔」として、一切の群生とともに眞實を慕ふて辿られたのであります。上人ほど凡衆を動かしたお方はない、それは決して偶然ではありません、上人は凡衆のうちに身を投じて凡衆と共に救はれたお方であつたからであります。

新しき日本語の表現

蓮如上人の御教化は「御文」にまとめられてあります、そしてその精要を詮じつめると「たのむ」といふ一語に結ばれるのであります。ある方のしらべたところによると、八十通のうち五十六通までこの語が示され、さらにその數が百三十三あるといふことであります。形式のうへから云つても、上人の御持言であつたことが首肯されませう。

尤も、この「たのむ」といふことは蓮如上人がはじめて、おもちゐになつたのではありません。相承の先德がすでにお須ゐになつて居るのであります。源信和尙の「横川法語」にも「信心あさけれども本願ふかきがゆゑに、たのめ

ばかならず往生す」とあります。そして法然上人も、親鸞聖人も、この語をおもちゐになつて居ります。それからのち、多くの方々によつて須ゐられたのではありますが、それにもかゝはらず、この「たのむ」の語は蓮如上人の標語とみてよいのであります、蓋し蓮如上人の手によつて、力づよく且鮮に一宗の精要をしめす教語となつたからであります。

上人はこの「たのむ」の語に「たすけたまへ」といふ語を冠らせて、「たすけたまへとたのむ」とおほせられました、こゝに上人のすぐれた釋功があるのであります。

（親鸞）聖人の一宗はたのむ一念の處肝要なり、かるがゆへに、たのむといふ事をば、代々あそばしおかれ候へども、くわしく、なにとたのめといふことをしらざりき。しかれば前々住（蓮如）上人の御代に、御文をつくり候ひて、

雜行をすてゝ後生たすけたまへと一心に彌陀をたのめと、あきらかに、しらせられたり。しかれば、御再興の上人にてましますものなり。（御一代記聞書）

と讃えてあります。まことに、そのとほりで、「たすけたまへとたのむ」といふことは上人の教化の特徴とまうさねばなりませぬ。「たのむ」といふだけでは、いかに「たのむ」ことであるかわからないかも知れないといふ懇切な御心づくしから、その「たのむ」こゝろを具體的にお示しになつて「たすけたまへとたのむ」のであると仰せられたのであります。いかにも物柔かに、一宗の肝要たる信心をおしめしくだされた教語であります。

この信心をあらはす語のうち、「南無」といふは天竺の語であり、「歸命」といふは支那の語であります、そしてこの「たすけたまへとたのむ」といふは日本の語であります。この日本の語で表現されたところに上人のねんごろなお心

づくしがこもつてゐるのであります。

信心安心といへば、愚痴のものは、文字もしらぬなり、信心安心などいへば別の樣にもおもふなり。たゞ、凡夫のほとけになることを教ふべし、後生たすけたまへと彌陀をたのめといふべし、なにたる愚痴の衆生なりとも、きゝて信をとるべし、當流には、これよりほかの法門はなきなりと仰せられ候。

（御一代記聞書）

おもふに、上人は學文なぞしない文字をも知らぬ凡衆を救ふて、聖化の生活を圓成するために、日本人の念持しやすい日本の凡衆の言葉によつて、眞實の信心を表現されたのでありませう。こんな點に注意してみますと、この「たすけたまへとたのむ」といふ教語には、いかにもすぐれた智慧がひらめき、ふかい慈愛のこもつてゐることを感戴せずに居れないのであります。

大悲の勅命に信順せよ

さてこの「たすけたまへとたのむ」といふ教語は絶對歸依の信樂をのべられたのであります、くわしくいへば「たすけ給へる彌陀如來の不思議の本願力なりとふかく信ずる」(御文)ことであります。やさしくいへば「おたすけくださるお慈悲におまかせする」といふ意味であります、卽ち素純な信順のこゝろであります、親鸞聖人の「仰せにしたがひ、めしにかなふ」(銘文)とのたまふお言葉とおなじ調子と意味をもつた和語であります。

ところがこのありがたい教語を、あるとき正しい意味を取そこなふ人々があつて、凡夫が如來に祈り求めるやうに解釋したので、かなしくつまづいた人々

もありました。そこで、動もするとこの教語をなにか危いものゝやうに慮る傾向もないではありませんが、それは「あつもの」に懲りて「なます」を吹くやうなものであります。私たちはこの上人の慈愛のこもつた、そして行屆いた教語に素純な親しみをとりかへしたいものであります。

「たのむ」といふ語を抽象して一般的な解說をさがしたら、かなり多含な語であるから、請求や祈願の意味はないでもありませぬ、しかし、これが蓮如上人の教語となつたときは秋毫もかゝる意味をもつて居らないのであります、本如上人が御裁斷申明の御消息に、

彌陀をたのむといふは、他力の信心を安く知らしめ給ふ教示なるが故に、唯是れ大悲の勅命に信順するこゝろなり

とお示しなされたとほりであつて、たすけたまふお慈悲におまかせをしたのが

「たすけたまへとたのむ」こゝろであります。われをたのめといふ勅命に素直におしたがひまふすことであります。

従つてたのむ信心は、めぐまれたものであります。たのませてたのまれたまふのであります、たのむこゝろはたのませてたのまれたまふ佛心の領納に外ならないのであります、親鸞聖人の自然法爾章に「南無阿彌陀佛とたのませてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまうすなりときゝて候」とおしめしになつたとほりであります。曾て近江の金ケ森にまうでたとき、蓮如上人の御眞筆の三首の御詠歌を拝見いたしました、その第一首にいはく、

南無といふ二字の内には彌陀たのむこゝろありとは誰もしるべし

この御詠歌は「たのむ」こゝろが名號のうちに成就されてあることをねんごろ

に示されたものであります。

信心は佛智なり、佛智よりたのませらるゝ信心也と心得べし、たゞ彌陀如來のたのませられて御たすけあると心得べし、一向に他力也。（一期記）

この「たのませられて御たすけある」ことを、おたすけくださるとたのむので、全く他力のおめぐみであります。

「たのむ」といふことは言葉の當面の意味として信順であること、更に、その發起するところを内觀すると全く他力のめぐみであつて、すこしも自力の祈願を意味しないのであります。

すべてを與へすべてを統ぶ

たのむこゝろ、おまかせするこゝろ、この絶對依憑の信心は聖化の體驗であります。

聖化といふこと、すなはち救ひといふことは、われらが如來とひとつになることであります、このわれらが如來とひとつになりきることは宗教の極致であります。

そして、この聖化が宗教の極致である丈け、宗教の實踐上の問題となつてきました、宗教にさまゞの宗派のわかれたのは、詮ずるところ、この聖化の實踐法における見方の相違によるといつてもよいくらいであります。

この宗教の中心問題の上にわが淨土眞宗は眞實の聖化を如實に開顯されたのであります。則ち、凡夫が如來とひとつになるといふことは凡夫のはからひによつて成就されることではなくて、如來が凡夫とひとつになつてくださるおんはからひによつて成就されるといふことを開顯せられたのであります。これすなはち他力回向の妙趣であります。

聖化といふことは聖そのものゝ自爾の開展によるのであります、如來とひとつになれるのは如來そのものゝ自然法爾のあらはれであります、このありさまをわかりやすく示されて、蓮如上人は機法一體といふことをくわしく談ぜられました。

南無阿彌陀佛といふ如來の名號は、たゞ一切の群生を救ひたまふ客觀の「法」として成就されてあるだけでなくて、客觀の「法」がそのまゝ一切群生の心行として主觀の「機」となつてあらはれてくださるやうに圓成されてあるのであります。こゝに如來と凡夫との統一、法と機との一體が如來の名號卽ち「聖」そのものゝ內面性として成就されてあるのであります。わかりやすくいへば名

號はたゞ如來の法であるだけでなく機の信心となつてくださる、すなはち、如來が凡夫とひとつになつてくださるのであります。

さて、如來が凡夫とひとつになつてくださるおんはからひを窺ふとき「廻向」と「攝取」といふことがたうとく味はれます。

廻向とは「おめぐみ」くださることである、卽ち如來が如來そのものゝ生命を惜みなく凡夫におあたへくださることであります。

攝取とは「おさめとつて」くださることである、卽ち如來が凡夫の罪業をのこすところなくひきうけてくださることであります。

如來は惜みなく與へ殘すところなく統べたまふ、こうしたおんはからひによつて如來が凡夫とひとつになりきつてくださるのであります。廻向は如來が凡夫のものとなつてくださること、攝取は凡夫を如來のものとなしてくださることであります。

彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり、南無阿彌陀佛の主に成るといふは信心をうることなり。（御一代記聞書）

これは廻向の信心をのべられたのであります、如來が凡夫のものになつてくださるのであります。

彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身をまるめたる事なり。（御一代記聞書）

これは攝取の利益をのべられたものであります、凡夫を如來のものに統べてくださるのであります。

回向によつて內にいかす生命の糧となり、攝取によつて外にまもる哺みの手となりたまふ、內に生かすも外にまもるも別なものではない、たゞ行屆いた如來のおんはからひの全相を味はふに外なりません、かくて回向の法たる南無阿

彌陀佛はそのまゝ「おさめ、たすけ、すくふ」ところの攝取の法であります、かゝる法の全きおはからひを仰げば凡夫の手元に何等のはからひをさしはさむことも要しませぬ、たゞ兩手をはなして「おまかせ」するだけであります、「たすけたまへとたのむ」だけであります。

たのむこゝろといふは、卽ち是、阿彌陀佛の衆生を八萬四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を衆生にあたへましますこゝろなり。（御文第四帖第六通）

この御文は機法一體の原理に住して、攝取と回向との聖化のおはからひの互具することを示し、それによつて絶對依憑の信卽ち「たのむこゝろ」の純熟することをのべられたものであります。

かくて上人は宗教の極致をあるがまゝに開顯してくだされたのであります。

ねてもさめてもまふすこと

「草の庵にねてもさめてもまうすこと、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」これは良寛の五合庵における法悅であります、わたくしはこの歌をくちずさむとき、いつでも蓮如上人をおもひうかべるのであります、「ねてもさめても稱名念佛すべきものなり」といふのが上人の御文に、しば〳〵くりかへされることばであります。南無阿彌陀佛をめぐまれてよみがへり、南無阿彌陀佛にまるめられて生かされてゐられた上人は、ねてもさめても、お念佛をまふしてゐられたのであります、のんびりとくつろいでお念佛をまうされたお姿、身もこゝろも大慈の御手に任せきつて安らかに稱名せられたお姿、御文をいたゞいて「ねて

もさめても稱名念佛すべきものなり」のおことばをいたゞくとき、上人のお姿が髣髴としてしのばれます。

上人のお念佛はめぐみに生きるものゝうつくしい姿でありました、佛恩を感謝しておのづからお念佛まふされたのでありました。

救ひをもとめて祈るものゝ聲は切實なれども、そこには充たされないやるせない焦慮があります。稱へねば救はれないといふ律法に縛られたものゝ念佛は形式はとゝのふてゐるが、空虛な淋しさがあります。上人の念佛はこんな淋しいものでもなく、いらいらしたものではありません、救はれめぐまれて生かされる御恩をよろこぶ充たされたものであります、子供が母よ母よとよびながら慈愛を享けて生き伸びてゆくやうに、念佛は慈恩を感荷してゆくものゝよろこびのしらべであります。こゝにはじめて、純全な念佛三昧があらはれたのであ

ります、佛とひとつになるために念ずるのでない、佛とひとつになりきつたところに念ぜずに居れない念佛であります、こゝに如來とひとつになつて生きるものゝ法喜があるのであります。

蓮如上人はいかにも自然にお念佛もうされました、そしてお念佛をまうしてゐるといふこゝろもちよりも、お念佛まうさせてくださるのであると、よろこんでゐられたのであります。

口に稱ふるは我等が申す樣には候へども、信にもよほされて彌陀より申させらるゝ念佛也、悉く他力にもよほされて申すなれば、皆他力より申させらるゝ稱名と心得べきなり。（一期記）

まことに素純な三昧の境地であります。これは謙つて生ける虔ましいこゝろにめぐまれた神祕感であります。

たしなむこゝろも他力

信ずるは他力である、私が信じたのではない、御方便によつて信じさせていたゞいたのであります。稱へるは他力である、私が稱へてゐるのではない、御念力によつて稱へさせていたゞくのであります。

信ずるのも稱へるのも救はれてゆく心行はすべて他力である、一切合財がおはからひにはからはれてゐるのである、上人はこうしたこゝろもちで、素直に全きおめぐみを領納されたのでありました。「なにもかもあなたまかせ」これほど素純な聖化の生活はありませぬ。

ところがこの他力の心行といふこと、「あなたまかせ」といふことを勘違ひして、なげやりの生活、なまけものゝ天國のやうに、奇蹟をまちまうけてゐるものがあります。

うちすてゝおいてはよろこべない悲しい大地であります、わがまゝ氣まゝではうつくしく生き伸びられないあさましい凡夫であります、よろこばれない生活であればあるほど、すこしでもよろこばれるやうに氣をつけさせていたゞかねばなりませぬ、あさましい凡夫であればあるほど、できうるだけはつゝしませていたゞかねばなりません、この氣をつけること、このつゝしむこゝろを上人は「たしなみ」と仰せられました、そして、たしなみが大切であるといふのが上人の御持言でありました。

「たしなみ」とはもとは嗜き好むことであります、うつくしい趣味や、よいことを嗜き好むことであります、それが一轉して、下品なことや、わるいことを

ひかへつゝしむことを「たしなみ」と申すことになりました、つまり善いことに精進し悪いことを制御するこゝろもちを「たしなみ」といふのであります。上人はいつも、この「たしなみ」といふことばをくりかへして美しい徳を修得せられました、試みに御一代記聞書をひもとくと、いたるところにこれが示されてあります、その一二を抄録いたします。

一度のちかひが一期のちかひなり、一度のたしなみが一期のたしなみなり、そのまゝいのちをはれば一期のちかひになるによりてなり。

佛法者の少しの違を見ては、あのうへさへかやうに候とおもひ、我身をふかくたしなむべきことなり。

人はそらごとを申さじとたしなむを隨分とこそおもへ、心にいつはりあらじとたしなむ人はさのみ多くはなきものなり、又よきことはならぬまでも世間

佛法ともに心にかけ、たしなみたき事なり。

そして、上人ほど修道について深い工夫と用意をなされたお方はありません。聞法、精進、反省、修徳、すべてにおいてこゝろをくだかれました。しかも、それらの「たしなみ」がそのまゝ如來のおはからひによることを内觀して、「たしなむこゝろも他力なり」と感ぜられたのでありました、從つて、そこには律法めいた窮屈さはすこしもありません、もとよりさとりすますなどいふ厭味はありませんでした。

佛恩をたしなむことゝ仰候事、世間の物をたしなむなどゝいふやうなることにてはなし。信のうへは、たうとく有難く存じよろこび申す透間に懈怠申す時、かゝる廣大の御恩をわすれ申すことのあさましさよと、佛智たちかへりて有難やたふとやと思へば御もよほしにより、念佛を申すなり。たしなむ

とはこれなる由の義に候。（御一代記聞書）

いかにも深められたこゝろもちであり、淨められたよろこびであります。たしなむところの工夫がそのまゝ如來の御催促にあづかつてゐることを内觀されて、まる〳〵他力にまるめられて法悦の生活を圓成されたのでありました。

念佛三昧

眞實の御名

親鸞聖人は眞實は南無阿彌陀佛であると仰られました、このお言葉はたくさんの人々によつて繰返されてゐるものゝひとつであります、また、たくさんの人によつてそれが理解されてをると思はれてをる言葉であります。人のことはしばらく別として、自分自身の心持をいひましても、眞實が如來であり、南無阿彌陀佛であるといふことは、よくわかつたつもりでをる、わかつたつもりでをるのだが、わかつたつもりといふことは、よほど警戒しなければならないことであつて、このひとつの言葉を靜かに味はうて見るといふと、よほどの深さをもつてをると思はれるといふのであります。いくらか學問といふやうな世界

に籍を置いてをるものになりますと、いろ〳〵なことをやつてをりますが、結局は眞理を探してゐる、そして眞理といふても机の上で飾つておくやうな眞理でなくて、われ〳〵がほんとうに生きてゆく魂になる眞理をほしがつてゐるそしてあれであらうか、これであらうかと摑んで見たり放して見たりする。これは學問の世界に居る人の話でありますが、行の世界にをられる人、近いところでは一燈園にをられるといふやうな人たち、懺悔もして見る、勤勞もして見る、奉仕もして見る、形はちがつてゐるがほんとうにわれ〳〵を生かすものがどこにあるかといふことを求めてゐられるのだと思ひます。これは眼立つものについていふたのでありますが、人間は或る意味においてみな順禮者である、みな何かを求めてゐる、それを推しつめて見ると、皆が眞實を求めやうとしてをる、さういふときに、われ〳〵の小さな經驗の上でかうであらうか、あゝで

あらうかと考へて來て、どうもあれでもないやうだ、これでもないやうだといふ氣がする、さういふ迂餘曲折を親鸞聖人の言葉でいふと「信に迷ひ行に惑ふ」のであります、右に往き左に往き十字街頭にたつてさまよへる旅人の前に、眞實は如來である、眞實は南無阿彌陀佛であるといはれた親鸞聖人の言葉を靜かに受とると、眼の醒めるやうな感じがするのであります。そしてすでにわかつて居つたと思ふてをつたことが、ほんとうにわかつてをらないのであつて、この一つの言葉の中には萬人を靜かに考へさせる深いものが示されてある、かう感じられるのであります。

そこでそれを私はわれ〳〵の平素お慕ひ申し尊敬してゐる方の上における生活をふりかへつて見たときに、如何にもその地上における眞實は念佛ひとつであるといふことがうなづけるやうな氣がするのであります。

先聖のみあと

法然上人がなくなられる時に、「昔からの聖者方がなくなられたあとには、みんなが追慕する一つの舊蹟が殘つてゐる、あなたの御舊蹟としてどこを保存いたしませう」とおたづねしたときに、法然上人は「おれの菩提所なんかつくつてくれるな、わがあとは稱名のあるところ、すなはち、わがあとである、お念佛がとなへられるところ、そこがおれのあとである」斯ういふお答でありました。これに類した法然上人のお言葉を頂くと、枚擧に遑ないほど出てゐるが、今の言葉が法然上人の最後の言葉のひとつだといふことに注意して見て、非常に貴いものであると思ふのであります。

一體われ〳〵は眞實がお念佛だといふ言葉をいつてゐるが、どれだけそれがうなづけてゐるか、受け取れてゐるかといふことはよほど反省されなくてはならないのであります。

また、親鸞聖人もその通りであつて、歎異鈔の第二條を頂くと、どなたもよく知つてゐられるやうに「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」これは親鸞聖人の御自督であつて、非常に明快なお言葉であります。

それから蓮如上人になりますと、實にわれ〳〵に手近くそれが現はれて來てゐる。蓮如上人といふお方は念佛に對して素直な親しみをもつてゐられたお方であります。よくかういふことをいふ人がある、「親鸞聖人は念佛往生といふことをいはれたが、今の淨土眞宗の信仰は蓮如上人の拵へたもので、親鸞聖人の教化と大分ちがふ」と、かういふ風に相當の學者が考へてゐるらしい、それから今でも行信論などで問題になつて來ると「お文さまではこのまゝで助けるといはれるのに、お聖人さまになるとお念佛申して救はれるのだと仰言つてあるどうも御教化が二つある」と、かういふ風にすらかんがへてゐるが、それはおそらく觀方が皮相である、筋が通つてをらないのだと考へられます。

蓮如上人と名號本尊

前述のとほり蓮如上人は名號本尊の復古者でありました。「他流には名號より繪像、繪像よりは木像といふなり、當流には木像よりは繪像、繪像よりは名號といふなり」といふのが蓮如上人の非常に卓拔な批判でありました。これは一

面からいふと蓮如上人が本尊に對する復古運動を行はれたのであります。

蓮如上人は實に物やはらかな、そして非常によくわけのわかつたお方です、門徒のものが來て、御說法してつかれるといふと踊を踊つて見せて御法義を說かれたといふ位であつて、それがやゝもすると蓮如上人はお上手がすぎる、そこにいや味があるなどと考へる人もあるのでありますが、それは決して魂のない如才なさではない、いはゆる教家の手管と違ふのであつて、非常にはつきりしたものをもつてゐられるのであります、さういふものやはらかな、蓮如上人がさういふ手きびしい御本尊に對する復古運動を起された、「御當流では木像よりは繪像、繪像よりは名號である」、親鸞聖人が盡十方無碍光如來といふ御名號の前にひざまづかれたお心持をそのまゝ復活せられました。そこでこの南無阿彌陀佛といふ御名號に非常に親しみをもたれました、また、蓮如上人のお言

葉のなかに「日本で自分ほど澤山の名號を書いたものは居るまい」といつてをられるのであります。今日見ましても蓮如上人のお筆のあとが非常にたくさん殘つてゐる、それはいはゆる本尊の統一をはかられたのであります。殊に虎生の名號などゝいふのがありなす、それは恐らく荒むしろの上に紙を伸べてお書きになつたからだと思ひますが、とにかく「日本で自分ほどたくさんの名號を書いたものは居るまい」といつてをられる、さういふやうなところを見ましても蓮如上人はほんとうに南無阿彌陀佛といふ御名號に非常に深い親しみをもつてゐられたことがうかゞはれます。そして、さういふ大膽な本尊の復古運動を起された英邁な批判者でありながら、ほんとうに處女のごとき素直さをもつて、この尊いものを一點一劃でもまちがへては大變だといふので、名號を書かれるときには、お聖人さまの書かれた文字の通りに書かれたといふのであります。

こゝに上人の素直な態度と、床しい心持があると思ふ、眞理をうけつぐものには獅子のごとき勇敢さと、乙女のやうな素直さをかね具へてゐなければ、その資格がない。上人がこの名號本尊をほんとうに革命なされたといふことは大變な果斷なことであります。その位の勇敢にして徹底せる批判者でありながらこの貴い魂を、この貴い眞實なるものを、お聖人さまのおよろこびになつたまゝで喜ぶべきものであると念じて聖人の御流儀にかぎりてあそばしたのであります。そこでいつでも反省させられることなのですが、その眞實をあらはすのには、ほんとうに愼みぶかい心もちと、どんなものでもぶち破つてゆく勇氣それがうまく出て來なければ眞理に仕へる資格がない、われわれは、やさしうならねばならぬところで出しやばつて見たり、勇敢にならなければならぬところで腰ぬけになつたり、まことに申しわけのないことであるが、さういふことを注意することによつて日夕反省させられてをる、闘ふや眞理のために闘ひ、順ふや眞理のために順ふ、これは目ざめたるお聖人の遺弟としてその芳躅を慕ふものゝ餘程注意をしなければならぬところであります。

生命の供養

さういふことで蓮如上人が非常にたくさんの名號本尊をお書きになつたが、それは決して形式的な問題を取扱はれたのでなくて、御名號を書かれるまゝが人生に對する生命の供養でありました。「實悟記」には次のごとく記されてあります。

法印兼緣幼少の時、二俣にてあまた小名號を申入候とき、信心をやるぞ〳〵

と仰られ候、信心の體名號にて候仰いま思合候との義に候。

これを拜讀して坐ろに生命の供養といふことを思ふのであります。御名號を與へて信心をやるぞとの仰せ、實にたふといことであります。年の暮に金に困つてゐるものに金をやるといふ位大きな施し物はないと考へるのは世間普通の考へ方であります。しかしながら奈落に落ちてゆく魂に、お淨土に生れる魂を供養することにはあまり驚きをもつてゐない。けれども名號を申し入れたとき、信心をやるぞといはれた蓮如上人ほど大きなものを施されたお方はない、地上の乏しきものに對して無限の大施主でありました。

また、蓮如上人はお念佛のなかに生きられた方であつて、御一代記聞書に次の如く仰せられてあります、

丹後法眼衣裝とゝのへられ前々住上人の御前に伺候さふらひし時、仰られ候、衣の襟を御たゝきありて、南無阿彌陀佛よ、と仰られ候。又前々住上人は御疊をたゝかれ、南無阿彌陀佛にもたれる由仰られ候き、南無阿彌陀佛に身をばまるめたると仰られ候と符合申候。

斯ういふ記錄を見ましても、上人がほんとうに身も心もお念佛のなかに安らかなよろこびをもつてゐられたといふことがわかるのであります。

他力の念佛

親鸞聖人は「南無阿彌陀佛」のみ名、それこそ地上に光るたつたひとつの眞實であると仰せられました、これを法然親鸞蓮如といふ聖者方の實際の生活の上にふりかへつて見ると、いよ〳〵粲として光りを放つてゐると思ふ。そこでこ

のお念佛を素直に喜ぶ人は非常に恵まれた人であります、ところが非常に注意しなければならないことは、「神よ神よといふものが必ずしも天國に入らず」といつた聖者もありますが、お念佛を稱へてをるものが必ずしもお淨土に生れない、これは親鸞聖人の深く警戒されたところです。お念佛を稱へることなしにおちてゆく魂も、ほんとうに取返し出來ないことですけれども、もつと遺憾なことは、お念佛をとなへながら如來を裏切つてゆく、かういふことはよほど警戒しなければならない、さういふことをいはれて來ると、それぢやどう稱へたらいゝ、どう受け取つて來るか、さうなると餘ほど人間は窮屈になつてしまふて行詰りますが、さういふことを意味するのではない、如何やうに喜びませうかとお尋ねしたら法然上人は「凡夫の生れつきのまゝで申せ」と仰せられた如何にも明快であります。親鸞聖人は「義なきをもつて義とす」と仰せられた

凡夫の手垢をつけずに喜ぶといふことであります。名號は信仰の對象であるといふことは誰も知つてゐる、しかし信ずることが名號のあらはれであるといふことは多くの人に忘れられてゐる、南無阿彌陀佛は稱へられるものであるといふことは多くの人は知つてをる、南無阿彌陀佛はそのまゝが稱へ出されて來るのだといふことに氣がつかないかのやうであります。

そこでこの南無阿彌陀佛を手垢をつけずに喜ばれた蓮如上人の心持を手短に申しあげやうと思ふのであります。

生ける聖化

仰に、南無といふは歸命なり。歸命といふは彌陀を一念たのみまいらすること

ころなり、また發願廻向といふは、たのむ機にやがて大善大功德をあたへたまふなり、その體すなはち阿彌陀佛なり、と仰せ候ひき。

これは御一代記聞書にのせてあります、何十回となく頂いた言葉なのでありますが、私はこの頃ことのほか、これを見て、何といふ貴いことだらうと思ふ、これを讀んでゐて、坐に生ける聖化といふことを感じます。聖化といふことは如來とひとつになるといふことです。如來が私とひとつになつて下さるんだといふことであります。名號は佛壇の中に固定してゐらせられる偶像でなくて、如何に逆謗闡提の輩なりとも、素直に信順させ手を合せてお念佛を稱へさせるまで生きてはたらいて來る力であるといふことを考へたときに、非常に貴いことであるとおもはれます。ほんとうにそこに兩手を放すといふ心持、自力のはからひを投げ棄てといふ心もちが自然に會得されるやうな氣がして、この簡

單な蓮如上人のお言葉を近時は殊のほか深く味はつてをるのであります。

このお言葉は善導大師の六字釋のお心を喜ばれたものであります。善導大師といふお方は、凡夫がお淨土に生れる道がお念佛を申すひとつであるといふことを非常にはつきりお示し下されたお方であります。凡そその南無阿彌陀佛の六字に解釋を加へられたのが、善導大師であつて、ほとんど淨土敎における典型的な解釋であります。そしてそれ以外の解釋は誰れもしてをりません。これは生命に仕へるものゝ謙讓さであります。この淨土敎で善導大師の六字釋以外に、南無阿彌陀佛に對する新しき解釋を誰れも試みてゐないのは、それは獨創力がないのでもなければ味ふてをらないのでもない、この貴い生命の前に人間が最少限度の言葉しか使ふてをらないのです、やむを得ざる說明以外に說明を加へることを恐れたのです、かゝる謙讓な淨土敎の聖者たちの態度はいかにも

床しいものと申さねばなりませぬ、親鸞聖人にしてもその通りであります。蓮如上人にしてもその通りであります。この善導大師の六字釋以外に出てをらない勿論善導大師の六字釋の上に示されてをること、それが法然上人、親鸞聖人蓮如上人の上にあらはれて來て、白き花には白き光あり、赤き花には赤き光りありで、おの〳〵美しい色彩をあらはして來てをるといふことはいふまでもないが、決して善導の上にあたらしきものを加へてをられないところに非常な妙味があります。

そこになると、結局は、なんぼ學問して見ても學問では救はれないのです、ほんとうにしつくりするのは素直にお念佛するときであります、たゞお念佛をよろこぶのが一番純粹であります。解釋を入れて見れば見るほどいけない、さうなると「伊達といふ伊達しつくして紙衣かな」といふ垢ぬけのした世界があ

る、ほんとうに「淨土宗は愚者になりて信ずるなり」と智慧第一の法然房があらゆるものをすて〻愚者にかへられたところが何ともいはれない眞理をつぐもの〻叡智のひらめきです。美しい智慧がひらめいてゐる。とりわけて蓮如上人はこの善導大師の六字釋を尊重されました、八十通のお文をよむと、言南無者の釋がいくたびもいくたびも引いてある、面白いことには何時も同じお說教をなさるのです、われ〳〵のやうなものがやると、あゝまたあの話か、あれは何べんも聞いたといつて向ふを向いてしまふのでありますが、「法敬坊、九十まで存命さふらふ。このとしまで聽聞まふしさふらへども、これまでと存知たることなし、あきたりもなきことなり、とまふされさふらう。」いつもかも同じことを繰返してゐられた蓮如上人も貴いが、それを聞いていつも新しき驚きと感激をもつて聞いてゐた法敬坊順誓といふ人も非常に貴い方でありました。

名號の釋義

さてその「言南無者の釋」といふは、善導大師が南無阿彌陀佛を解釋されて玄義分に「南無の言は卽是歸命である、亦是發願廻向の義である、そして阿彌陀佛は卽是其行である」と申された御釋です、この歸命と發願廻向と卽是其行を六字釋の三義といふのであります。これはつまり、南無阿彌陀佛は唯願無行でない、願行具足である、全一の生命であること、願もあり行もあるといふことを示されたのであります、卽ち南無阿彌陀佛のなかには、われわれがお淨土に生れる資糧がすつかり揃うてゐる。信、願、行といふ成佛の三資糧が揃ふてゐると顯開されたのが、善導大師の御釋であります。

蓮如上人はこの善導大師の解釋をほりさげてゐられました。そして、そのほりさげ方は親鸞聖人のほりさげ方をうけつがれたのであります。

南無といふは歸命なり、歸命といふは彌陀をたのむ一念、たのみまゐらする心なり。

まづ、南無といふは歸命、歸命といふは「たのむ」ことである。「たのむ」といふことは「おまかせ」をするといふことであります。佛さまにおまかせするのが信心であります。

つぎに、發願廻向とはどういふことか、本來はわれわれがお淨土に行く發願廻向であります。發願といふことは御淨土に行きたいといふねがひ、廻向といふことは品物をもつてゆくことです、そこで發願廻向はお淨土を求めてゆく行者の心もちであるが、それを深めて「賴むわれにやがて大善大功德を與へたま

ふ心なり」とのべて、佛が私に功德善根のありだけを施して下さることであるとまうされました。

最後に、施してくださる物體は如來の全生命である、「卽ちその體は阿彌陀佛なり」とあるはこの意味であります、如來はその全生命を惜みなくわれわれに與へて下さるのであります。

これをまとめると次のごとくであります。

卽是歸命（信受心）
發願廻向（施與心）
卽是其行（廻施物）

この釋についてはいくつか味はふべき點がありますが、少くともふたつの妙趣があると思はれます。

施心と施物の一致

第一は施心と施物の一致であります。如來が私を救ふのは外部的に救ふのでなくて、如來がその全てを施して私を生かすことです。施してくださるものがらは何であるかといふと南無阿彌陀佛であります。南無阿彌陀佛は佛の正覺の嘉號である、その如來の內證も外用も、如來の全體のおさとりがそのまゝ衆生の救ひの力として與へものとして成就されてあるのであります、而して與へられるものがらが、そのまゝ與へやうとする心となるのであります。南無阿彌陀佛の全體が與へやうとする心卽ち施心であり、南無阿彌陀佛の全體が與へる物柄卽ち施物であります。地上では施物と施心とが二つある、ところが、名號にお

いてはこの二つがひとつであります、こゝではじめて愛は惜みなく與へるといふ意味が成立する。さて南無阿彌陀佛はわれに與へて下さるものがら卽ち施物であるといふことは多くの人の氣がつくことですけれども、それが與へるこゝろ卽ち施心であることが仰がれないのです。お內佛の名號を拜んで居つて、施物といふことは仰がれるが、そのまゝ與へる心卽ち施心であるといふことが一寸見忘れられる、それを見忘れてをるからこちらの方から探さうとしてをる。名號を掴まう掴まうとしてをる、名號の施物そのまゝ與へようといふ施心があることを見失ふてをるから掴まう掴まうとしてをる、こゝに施心と施物の一致といふことは非常にありがたいことです。與へるものと與へる心、與へる心の全體が與へるもの、南無阿彌陀佛は何かといふと私に與へて下さる如來の全生命である、そのまゝが私に與へんとする如來の願心である、そこでその南無阿

彌陀佛といふ嘉號はいかにもわれわれに親しみの深いものになつて來るのであります、愛は惜みなく與へるといひますが、ほんとうに惜みなく與へるものがあればそれは阿彌陀如來だけであります。

多くのものは、なんぼ他人を愛して居つても自分自身を生かしたあまりものを與へるか、若くは自分自身を愛することになる程度において與へてゐる、さらに穿つて云ひますと與へることによつて奪はうとしてをる、そこになるとほんとうにお念佛のみが、眞實の大施であります。かくおもふとき、如來の名號をいたゞくものは靜かなお慈悲の讃嘆だけでなしに、動けるお慈悲を仰信なければならないのであります。向ふに對象になつてをる佛樣のお慈悲だけでなしに、かのお慈悲がこの私に働きかけて下さるといふことを感佩しなくてはなりませぬ。

施與と信受との互具

如來は與へて下さる、われらは信ずるひとつである、眞受けにするひとつである。ところが素直にうけとる心が出て來ない。信ぜんとして信じ得ず、これは恐らく眞宗の信者の最後になつてゆきつまる淋しさのひとつでせう。おまかせする一つ、受けとる一つが出て來ない。この問題がいはゆる、「信にまどひ行にまよひ」と親鸞聖人の仰言つた點でありますが、これは何人も經驗した淋しさです。これについて第二に施與の心と信受の心との互具を示されました。南無といふのは歸命であり、また發願廻向である、その歸命は信受のこゝろ、發願廻向は施與のこゝろであります。如來の施與の心がわれらにあらはれて信受

の心となつて下さる、與へる心が受け取る心になつて下さる、實に意味の深いことであります、そこで初めて他力廻向の信といふことがわかる、與へやうとする心が徹底したところに受けとる心が出て來る、受けとる心は汝が用意せよといふ程度の與へ方は、いまだ施心の徹底せざるものである、與へる心のほかに受けとる心がない、與へる心が受け取る心になつて來る、一つの南無が與へる心で受けとる心、受けとる心で與へる心、といふ意味は、受け取る心になつて與へるのです、母親が子供に菓子を與へますとき、子供に頂戴しなさいとおしへて與へます、これは實に美しい仕方です。ところが、そんな窮屈なことをいはなくても好い、頂戴しなければやらぬなどといふことはない、そんな心を親はもつてをりません、懷にある金を持つて行つても笑ふてをるところに親馬鹿があるにもかゝはらず、手を合せなさいとか頂戴しなさいとかいふことは味

ふべきことです、それは窮屈であるなどゝ批議してはならないのです、窮屈でもそれは愛の徹底です。與へるものを盗んでは手のなかに掴んでも見失ふてしまふてをる、親のくれる菓子でも掴んで逃げては、菓子の形は掴んでも菓子の本質は見失ふてをる、頂いて見て、はじめて與へようとする心もちが、愛の全體がしみ〴〵と受け取れる、受け取る方法を教へてゐる、律法ではない、律法だと思ふたら大きに間違ふ、頂く手も與へようとするところの母の愛の徹底である、こゝに妙味がある、それを受け取るぢやの、となへなさいぢやのといはれると、どうもおかしなことぢやないかといふ疑問を投げる人がある、他力が自力になるんでないかと考へる人があるが、それは實は徹底せざる觀方であります。そんな窮屈なことでない、こゝではじめて受けとるのも、となへるのも全く南無阿彌陀佛のひとりばたらきである、かういふことが非常にはつきり感

佩されて來るのであります。

純全なる他力

與へるものがらと與へる心とが、南無阿彌陀佛である。與へる心の南無阿彌陀佛が、受けとる心の南無阿彌陀佛になる。かうなると私の手細工を入れる餘地が一點一劃もない、まる〴〵他力である、こゝに「たゞ念佛して彌陀に助けられまゐらすべしとよきひとの仰を蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり」といはれた親鸞聖人のお心もちがいたゞかれます、凡夫の手垢をつけずにお念佛を頂くところに非常にありがたいところがあります。

要するにわれ〴〵がお念佛を稱へやうとする心持、救ひを求めやうとする心

持、それは極めて眞面目な心もちであるにかゝはらず、求めやうとすればいよいよ如來から遠ざかる、掴まうとすれば却て如來から遠ざかるといふ皮肉が出てくるのも、與へて下さるお念佛の性質がわからないから如實修行が出來ないのです、お念佛の性質がはつきり分つたら祈るかはりに感謝するのである、求めるかはりに受け取るのである、はからふかはりに任せるのである、おのづから如實修行がはつきり出て來るのであつて、貴いお念佛をわれわれの手垢をつけずに喜んでゆくといふことは大變にありがたいことであると味はねばなりませぬ。

彌生の蓮如忌

愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條、不思議なり、まことに當流法義にも、あひかなふ歟のあひだ、本望のいたり、これにすぐべからざるもの歟。しかれば、愚老、當年の夏ころより違例せしめて、いまにおひて本復のすがたこれなし、つねには當年寒中には、かならず往生の本懐をとぐべき條、一定とおもひはんべり。まことに宿善まかせとはいひながら、述懐のこゝろはしばらくもやむことなし。

これは大阪の坊舎において明應七年の霜月の御正忌にものされた最後の御文の一節であります。健氣な蓮如上人も、大阪の坊舎を建立なされてから、病みつかれました。明應六年の夏からおわるくなられ、その後、いくらか小康もあつたが七年の夏から藥餌に親しまれることゝなりました、「愚老、當年の夏ころより違例せしめて、いまにおひて本復のすがたこれなし」とはそれをのべられたのであります、とても、この冬は越されないと上人みづからも感ぜられ、それにつけても、門徒の人々の信心をいたゞくやうに念ぜられたのであります、功なり名とげられた上人としては、何も氣にかゝることはない、たゞ門徒の信心だけが氣にかゝるのでありました。

上人の病氣を案じながら、それでも事なく、年はあらたまつて、明應八年になりました。

もと大阪の坊舎は上人が御隱居所として造營なされたもので、心潛かに墳墓の地とも期してゐられたのであります、そこでいよ〳〵再び起つことができないと思召された二月には、大阪に「御葬所」の用意もあらせられたのでありました。

しかるに、二月十八日俄に山科の御本寺へおかへりになつたのですが、上人

のおこゝろもちは、はつきり窺はれます、御開山聖人のお膝元にて往生の素懐をとげんとなされたのに外なりませぬ。御重態のなかであるので、道中はおしづかに、大阪から山科へ三日かゝつて二十日におかへりになりました。

二十日に山科へおかへりになる否や、嗣法の實如上人に對して「一流の安心の次第の肝要は御文にくわしくのべておいたから、今は安心のことも、そんなに云ひ紛らすものもあるまいとおもはれる、このことを篤と分別して門徒へも傳へられたい、これが遺言であるぞ」と仰せられました。

二十一日には御眞影のまへに御參拜なされて、「今生ではとても御目にかゝれまいとおもひましたが、それでもこうして御目にかゝれました、何とまうしてよいか、ほんとうにありがたいことでございます」と、まのあたり生ける聖人に申上げるやうに、仰せられました。

二十三日には御往生なさる御所を御手くばりさせられました。

二十五日、周圍の土居を御覽になり、それから田輿に召されて堀の上をあちらこちらと御巡覽になりました、伊勢の宿の土居で御やすみになつて湯を召しあがられました、たま〳〵、お弟子の空善が新しい茶碗を用意してゐたので茶をたてゝさしあげると「大變爽かな氣分になつた」とおよろこびなさいました。

二十七日には、ふたゝび御影堂へ御參りなさつてそのお歸りがけのとき、「門徒の人々に名殘おしい」と仰せられ、田輿を後向にかゝせて、群參の門徒の方をしみ〴〵ながめながら御わかれなされました。

かゝるうちに、二月もすんで、三月になりました、あたりは春めいてきました。三月の朔日には北殿へ御出ましになつて、御子息達と御同座で御きげんよく、御くつろぎなされて、いろ〳〵と御雑談なさいました。折柄、城菊檢校も

伺候して、いろ〳〵と趣ふかいことを申上げました。

これをしづかに微笑んできいてゐられた上人は、やがて、居ならぶ御子息方を御見まわしなされて、「みんな一念の信心をよく〳〵いたゞいてお呉れ、これよりほかに遺言はないほどに」と仰せられました。

二日には「花がみたい、空善に申しつけよ、」と仰せであるので、空善は盡力して三日には、吉野から櫻を切つてまゐり、それを北のお庭に植つけて御覽に入れると、三首の御詠歌あらせられました。

さきつゞく花みるたびに猶もまたたゞねがはしき西の彼岸
老樂のいつまでもかくは病ぬらん迎へたまへや彌陀の淨土へ
今までは八十五にあまる身の久くいきしとしれやみな人

この日は御氣分もよくゐらせられたので、うら若いお子達にうたはせられて

おもての御座敷にお出ましになつて、お心をなぐさめられました。

七日の曉、自分で御脈をおとりになつて、「調子がちがふ」と仰せられ、醫者の藤左衞門をおよびになると、「胃のためにお脈がわるいのである」と診察しました。

それでも、この日は、御眞影へお暇乞にまゐりたいとて、御行水をなされ御衣裳をあらためられ、田輿に召されて阿彌陀堂へまうで、それから御影堂にまうでなされた、「今生の御暇乞にまゐりました、きつと極樂でお目にかゝります」と御眞影におわかれをなさるのでありました、集まつてゐた人々はみんな涙にくれました。

九日、御座を御亭へうつし、そこへお出ましになつて、法敬と空善と加賀の了珍を召され「さぞ、わが姿がみたからう。」「わが聲もきいて覺えておけ」と

仰せられて、しみ〴〵と名残を惜しまれました。

また「空善のくれた鶯の聲を慰んだ、このうぐひすは法をきけよともなく鳥さへ法をきけとなくに、ましてや人間であつて、殊に聖人のお弟子であつて法をきかないでは淺間しいぞ」と仰せられた。

また、慶聞坊に「なにかよんできかせ」と仰せられるので、御堂御建立の御文を次第に三通よんでおきかせすると「自分のつくつたものながら、殊勝や殊勝や」と仰せられました。

また、御臨終めさるべき、御枕一間のをし板に、開山聖人の御影をかけさせて、御自身は頭北面西に御臥床なされました。

また御自愛の栗の毛の馬がみたいと仰せられるので、四間の中、疊二疊をあげて、御床ちかく馬をつれてきて御覽に入れた。

この馬も感じたものとみえて、前脚をすこしのばし、涙をながし、首をたれて、尾をふることもしなかつた。

馬をひきかへすと、いとしづかに御椽の板をふんでかへつてゆくのでありました。

十七日の曉、御枕頭にて實如上人はじめ御子息の兄弟たちが打ちそろふて四返かへしの御念佛、和讃三首をおつとめになりました。

十八日に「我なきあとは、いよ〳〵氣をつけて、兄弟たちは仲よく〳〵らせ、その上、信心一味なれば仲もよくて御一流も繁昌するぞよ」とくりかくして仰せられました。

十九日から、重湯もおくすりも召上がらないで、たゞ念佛ばかり申され「はやくまゐらせていたゞきたい」と念ぜられました。

二十二日、容貌がすこしかはりかけて、「すつかり御開山のやうな御相好に似させられた」と、御子達やお弟子達は申されるほどでありました。

二十三日より、御脈がよくなつたり、わるくなつたりしました。

二十四日のあかつきから、御往生も近いとおもはれる御容體であるので、法敬房は右の御手をいたゞき、空善房は兩の御足をいたゞいて、二人とも心もくれ目もくれて、たゞ落涙するばかりでありました。

二十五日の午、いかにも御しづかに、御ねむりなさるやうに、御往生なされました。

いかにも、物靜かな御往生でありました。二月二十日から三月二十五日までこの一ヶ月あまりの御容體はつぶさに病床に侍つた空善の手記にしるされてあります。

いかにも、しみ〴〵と人生の情趣を味ひつくし、しづかに淨土をあこがれて物しづかに、終られました。

思ひのこすこともなく、すべてを圓かに成就し、全力をさゝげて一生涯聖い奉仕をなしつくされた人のみにあらはるゝ、めぐまれた最後のお姿でありました。熟しきつた果實がしづかに大地にかへるやうに、太陽が悔ゆることなく海の底にかくれたるやうに、まどかな御往生をとげさせられました。

さくらの花さく頃、うぐひすのなく頃、春の自然はわが蓮如上人の御往生をかざるにふさはしいものであります。

蓮如上人は「春の聖者」であらせられました。

昭和五年四月十九日印刷
昭和五年四月廿四日發行

定價金五拾錢
送料金四錢

著者　京都市高臺寺桝屋町三六二　梅原眞隆
發行者　京都市賀茂板倉町六一　玉置韜晃
印刷者　京都市壬生川五條下ル　藤澤淨圓

發行所　京都市賀茂板倉町六一　顯眞學苑出版部
振替口座大阪八七五三一番

不許複製

梅原眞隆序
高千穗徹乘著

四六版　定價金五拾錢
百廿頁　送料金四錢

顯眞學苑研究叢書

一遍上人と時宗教義

內容

祖師篇（一遍上人の傳記と信仰・二祖上人の傳記と信仰）
行儀篇（時衆・遊行・賦算・踊念佛）
教義篇（所依の經典・神勅相承・無安心の安心・離三業の念佛・一念往生・佛身と佛土）

發行所　京都市上京區賀茂板倉町六一
顯眞學苑出版部
振替大阪八七五三一番

梅原眞隆著・新刊發行

聖容

四六版　百二十頁
振假名付裝幀瀟洒
定價　金五十錢
送料　金四錢

目要

一、惠信尼文書
二、親鸞素描
三、殿の御往生
四、山を下りて
五、下妻の夢想
六、御臨終を偲ぶ
七、寛喜の内省
八、漂泊の沙彌
九、法縁と愛縁
十、尊き御供養

親鸞素描姉妹篇　一は惠信尼文書をこほし一は御消息に現れたる親鸞聖人の素描である。共に親鸞聖人を慕ふなつかしき法縁である。

御消息に現れたる親鸞聖人

四六版
振假名付裝幀瀟洒
定價　金五十錢
送料　金四錢

目要

○文は人なり○御消息の眞蹟と編集○大地に生きるものゝ悲歎○いやおむなの讓文○慈信房の義絶○顯眞實の殉難○わびしい晩年の隱栖○東關との道交○よきひとの仰せを蒙りて○外部の迫害に虐たげられつゝ○内部の動亂を悲歎しつゝ○信の卓越性と絶對性

京都市高臺寺桝屋町三六二
親鸞聖人研究發行所
振替口座　四四九八四番

終